URL
http://www.salon-newsmag.co.jp
E-mail
info@salon-newsmag.co.jp

第2785号
2008
5/7(水)
(毎月1,2,3,4,水曜日発行)
昭和24年7月26日
第三種郵便物認可

全国 理美容新聞
Salon Newsmagazine Corp.

本紙購読のご案内
月4回水曜日発行
（新年・夏季・特集発行月は月3回）
購読料 1ヶ月1,260円（本体1,200円）
年間分15,120円（本体14,400円）を前納
購読のお申し込みは最寄りのディーラーさまへ、または直接当社まで

発行所
サロンニューズマガジン株式会社
大阪市北区天満4－14－19
（新聞事業部）TEL06－6358－5805
FAX06－6358－5505
振替貯金口座 00920－6－129853番
東京都千代田区神田須田町2－5－9－3F
（新聞事業部）TEL03－5281－3070
FAX03－5281－3071

～関西で活躍する輝く女性美容師たち～

みんな笑顔で

●ゲスト・三木梨笑子さん（アートミキ代表）＆田口美保子さん（SAKULA代表）
●スペシャルゲスト・半田まゆみさん（ヘアラルト阪神理容美容専門学校理事長）
●インタビュアー・正木ゆきさん（もっと代表）

「美容師って"最高の職業"ですね！」

輝く女性たちは美しい――。今号では関西で活躍する美容師の2人、三木梨笑子さん（有アートミキ代表取締役）と田口美保子さん（株SAKULA代表取締役）、また若き理美容師の育成に尽力するほか、業界全体の繁栄のために講演活動などにも取り組んでいるヘアラルト阪神理容美容専門学校理事長の半田まゆみさんに集まって頂き、業界の素晴らしさや経営者としてサロン運営やスタッフの雇用、将来の夢などを語り合ってもらった。共通するのは「美容師って最高」という素直な気持ち。なお、インタビュアーは株もっと代表取締役の正木ゆきさんが担当。和やかな雰囲気の中でトークは進行した。

三木「小さい時からパーマ屋さんになりたかった」
田口「やり始めたら楽しくて、はまっていきました」

三木梨笑子さん

正木 三木さん、田口さんはお二人とも美容師であり経営者として活躍されていますが、まず美容師になったきっかけをお聞かせください。

三木 私は小さい時から何となく興味があって、祖母の髪の毛を触っていたときに「パーマ屋さんになりたい」と小さい頃から口にしていました。大人になるにつれどんどん美容への興味が湧いてきて、美容学校に行きたいって思いました。それがきっかけですね。

正木 美容学校はどんな理由で選ばれましたか？

三木 私は高校へ行きながら通信教育で勉強しました。

半田 平成10年から、美容師法が変わって、入学資格が高校卒業以上となりましたが、以前は高校に通いながら通信や夜間課程で免許を取得する人もいました。みなさんすごく苦労されていましたね。高校で試験があって、美容学校では通信のレポート提出があったり。

三木 でも楽しかったですよ。私の中では美容学校のことしか頭になかった。高校の勉強よりも、通信のレポートの方が楽しくて、楽しくて（笑）。

正木 田口さんのきっかけは？

田口 私は3代目で、両親とも美容師をやっていたので、どっちかっていうと美容師にはなりたくなかった（笑）。大学の途中で短大の友達がみんな就職し出して、自分だけが学生で取り残されているような感じになって、家がやっているしちょっとやってみよう、というのがきっかけです。やり始めたらすごく楽しくて、はまっていきました。

田口美保子さん

大学の在学中に通信で美容師の免許を取って、それから理容学校ってどんなところなのか知りたくて理容学校に1年間通って理容師の免許も取得しました。

半田 素晴らしい。両方の免許を持っているのはすごい強み。今、私の学校でも40代くらいの美容師の人たちが、理容の通信課程で入学してるんです。結構多いんですよ。どうしてかと聞くと、将来を考えた時、今は美容師としてやっているが、60代、70代までやっていく中で、理容師の免許も持っていたら、たとえば介護のお客様のシェービングができたり、理容店だと、年配になっても仕事ができるという利点がありますからね。

三木さんは正木さんが出版された本の中で「美容学校で学生生活を楽しんでみても良かったかな」みたいなことを話されていましたよね。

三木 はい。美容学校に通っていたスタッフと話をすると、楽しそうだし、行事やイベントに参加したかったですね。当時は早く美容師になりたいという一心でしたが、今思うと美容学校時代がもっとできていたかもしれないと思います。

正木 田口さんはどのような学校生活でしたか？

田口 大学卒業後のスタートでしたから、周りの学生さんは私より年齢は若いのに一生懸命やっているということをすごく感じました。ワインディングやシェービングなどすごく練習している。すごいと思いました。これは、うかうかしてられないなと（笑）。

三木「目の前のお客様を自然に好きになります」
田口「自然と言葉が出て、お客様が気になります」

正木 お二人とも、美容師になってから自分のサロンを持つまではどのくらいの年月がありましたか？

三木 私は10年です。その間はいろんなサロンに興味がありましたので、1軒で辞めたということではなくて、転々としました。

正木 店によってやり方など学んだんですか？

三木 経営者の考え方で違います。それは興味深い点でした。自分が経営するかしないの前に、いろんな美容師さんと知り合いたかったんです。とにかく何でも興味がありました。

正木 すごく印象に残っているサロンはありますか？

三木 最初に働いたサロンですね。今となっては一番いろいろ経験させて頂いたサロンだと思っています。同時に一番厳しかったです。

正木 田口さんの場合は、免許を取ってすぐご両親の店に入店されたんですか？

田口 学校卒業後、20年くらい勤めていた人と一緒にオープンさせて頂きました。ですから免許を持っていただけでオープン（笑）。他のサロンを知らなかったので、両親が紹介してくれたサロンにほとんど毎日、勉強に行っていました。

本当に何も知らない状態でしたから、メニューもどう作ったらいいかよく分からない。よくやってこれたなという感じですね。ですから2つのサロンを、何年間かずっと通わせて頂きました。

正木 全くパターンが違いますね。半田さんお聞きになってどう感じます？

半田 今の美容業界の縮図かなと思います。一から努力をして独立する人と、田口さんのようにご両親が継承されていて自身も経営するという人。どちらもそれぞれのよさがありますし、「苦労もあるでしょうね。

正木 理美容師さんって一生の仕事という感じがありますが、ご両親はまだ現役ですか。

田口 はい。「通ってくれるお客様がいる限りはしたい」と言っています。

半田 理美容師の仕事のよさはそこです。何歳になっても資格と技術さえあれば続けられるし、お客様にも求められる。ずっと仕事ができるのは素晴らしい。50代くらいになって、もしこの仕事をしていなかったら、いまからパートに行こう、新しい仕事をしようというのは難しい。でも、お客様に頼られてこんなにありがたい仕事をしていて良かった、という話をよく聞きます。

正木 引っ越しをしてもこれまで通っていたサロンに行くという方も多いかもしれませんね。

田口 そうですね。遠くから来て頂いています。

（2面へ続く）

半田まゆみさん

正木ゆきさん

正木ゆきさん

『元気・勇気・本気！～関西で活躍する輝く女性たち』第1～3弾まで発刊中

インタビュアーとして参加して頂いた正木ゆきさんは輝き続ける女性たちを『元気！勇気！本気！～関西で活躍する輝く女性たち』として本にまとめ、これまでに3冊発刊している＝写真。

今回、出演してもらった三木さん、田口さん、半田さんもすべて同書が縁となっての出会いで、正木さんを中心に関西で活躍する女性たちの輪が広がっている。正木さんは同書をシリーズ化していく構想で、今後は女性だけでなく関西で活躍する男性にもスポットを当てた出版を企画中だという。

ヘアカラー・ライブコンテスト2008

JHCA

①施術のすべてを見せる画期的な試み
②ゴールデンGPには熊倉、中屋さん

JHCA（NPO法人日本ヘアカラー協会）主催の「ヘアカラー・ライブコンテスト2008」（小西康正2007年度委員長）が4月29日、東京都渋谷区の国立代々木第二体育館で開催された。昨年までのようにカラーの仕上がりだけを競うのではなく、実際に会場でカラーリング技術を施すという業界初のライブコンテストに、アリーナはこれまでにない盛り上がりを見せた。テーマは昨年と同様「ステキな大人のヘアカラー」だが、部門を若干変更した"セカンドステージ"として行われた。

140人がエントリーしたA部門では、素敵な大人を目指す30代とグレイが出始める30代のモデルを使って、上質で品のあるヘアカラーや知的キャリアなイメージを競った。

一方、68人がエントリーしたB部門の選手たちは、50代前後のモデルを使ってグレイを生かしたり楽しむためのカラーにチャレンジした。

（5面へ続く）

次号は5月21日(水)発行です